

## 令和7年度 県外視察報告書

視察先所在地 東京都文京区大塚3-29-1

視察先機関名 筑波大学附属小学校

### ○ 視察テーマ

教師が「教える」「わからせる」授業をして、子どもたちが受動的になる学びから脱却するため、学習問題を子どもたちから見出し、自分たちの問題として追究する授業のあり方を筑波大学附属小学校社会部の実践から学ぶ。

### ○ 視察報告

#### 1 はじめに

##### (1) 筑波大学附属小学校社会部の授業研究との出会い

2年前の2月、筑波大学附属小学校の公開授業を参観した際、事前の自由参観授業で5年生の社会科の授業をみた。足尾銅山鉍毒事件が教材化され、最後まで谷中村の廃村に抵抗し続けた16戸のうちの1戸を写した写真には、5年生児童と年齢の近い子どもや写真下に書かれた「強制撤去」という文字に注目が集まった。写真に写った子どもの背後の家が破壊され、「仮小屋」にやむを得ず住んでいる現実を知るだけでなく、「意思に反して、無理やりに・・・」という「強制」の状態

当時5年生を担当していたので、公害のことも授業で扱ってはいたが、「鉍毒事件があったこと」や「田中正造という人物が鉍毒の現状を天皇に直訴した」ことなどを教えても、「大多数の利益のために少数の犠牲はやむを得ない」という現実に対して、児童の価値判断を問うような

授業はしていなかった。授業者の先生は、協議会の中で、「子どもたち一人一人が社会的事象に対して問いをもち、自分たちの問題（学習問題）として追究しながら社会認識を深めていくとともに、みんなが幸せになるにはどうすればよいのか、自分なりの考えを問い続けていくような授業をしたい。」と述べていた。

教師が求める答えに子どもたちを導くのではなく、子どもたちが社会的事象を他人事ではなく「自分たちの問題」として受けとめ、その解決にむかって追究していこうとする授業づくりをめざして、夏休みに行われた「初等社会科授業研究会」に参加させていただいた。

##### (2) 今回の公開授業から学んだこと

今回の研究会では、四本の授業が公開されたが、紙面の制限もあるため、6学年の授業について述べたいと思う。



## 第6学年 「明治の新しい国づくり」

### 1 本時の目標

時刻（時間通りに行動する）を小学生に教えることを明治政府が重要視していたことを知り、なぜ、それが必要だったのかということについて、自分なりの根拠をもって考えることができる。

### 2 授業を見る視点

（子どもと社会をつなげる教材の選定、これまでの概念を砕き、多角的に物事を見る授業のデザイン）

寺子屋では、自由に来て、自由に帰っていったのに、どうして明治時代の学校では、時間割を作ったのだろう？

学習指導案では、上記の学習問題を設定して、時間を守って行動することを、なぜ明治政府は国民に浸透させる必要があったのか、その理由を以下のように考える授業が構想されていた。

- ・鉄道が走っているから
- ・工場で働けるようにするため？
- ・軍隊で、時間通りに行動できないと困る。

→鉄道が運んでいるもの（絹）運んでいるところ（港）民間人の集まりの軍隊（集団行動）

### 3 授業の実際

授業では、明治時代の教室から、時間割が掲げられていることに子どもたちが気づいたが、江戸時代の寺子屋におけるタイムフレームの自由さとの比較につながるつぶやきはなかった。時間割がなんであるのか、雑談のように発言されていく中で、授業者が「今みんなが考えようとしていることは・・・」と言いながら、学習問題が以下のように示された。

どうして明治時代の学校には、時間割があるのだろう？

教えたくなる気持ちを抑えられない自分なら、寺子屋の様子と時間割を提示して、違いに目を向けさせようと誘導したり、富国強兵における国の方針を話したりしていたと思う。授業者は、子どもたちの考えを根本に据え、教師主導的な流れをつくらうとはしていなかった。また、子どもたちは手元にある資料を根拠に考えを醸成し、根拠のないことは決して発言しなかった。私の目の前で話し合っていたグループでは、「国が学ばせたいことを決めて、（それぞれの）学校でどのくらい学習したか調べやすいからつくったんじゃないかねえ」とつぶやいた子がいたが、どこに書いてあるのか、ほかの友だちに聞かれると困ってしまい、全体で発言することはなかった。授業の終末では、このままでは結論が出ないから、「知っている人に聞いてみよう」ということになり、その中には「文部科学省」などがあがっていた。

### 4 授業の感想

授業者の先生は、協議会で「子どもたちが『調べたい！調べてこないと・・・』という学びに向かう気持ちを育てたい・・・」と述べていた。教師主導の学びでは、この気持ちは育たないだろう。筑波の子どもたちが夏休みにどんなことを調べたのか、授業者の先生に聞いてみようと思っている。



## 令和7年度 県外視察報告書

視察先所在地：鯖江事業所 〒916-8585 福井県鯖江市和田町 9-1-1  
朝日事業所 〒916-0146 福井県丹生郡越前町朝日 22-7-1  
視察先機関名：社会福祉法人 光道園 鯖江事業所・朝日事業所

### ○ 視察テーマ

光道園での人と人とが心を通わせる学習会を通して、教材と人の可能性を探る

### ○ 視察報告

#### 1 視察内容

ほぼ全都道府県から集う盲重複障害者の方々と教材を使用した学習会を行う

#### 2 視察日程

月	日	曜日	時間	場所	内容
7	26	土	14:30~16:30	鯖江事業所	学習会
7	27	日	10:00~11:30	鯖江事業所	学習会
			14:00~16:00	朝日事業所	学習会
7	28	月	10:00~11:30	朝日事業所	学習会

#### 3 各日の様子

##### (1) 研修1日目

13時頃に鯖江駅で集合し、研修参加者10名で鯖江事業所へ向かった。到着すると職員の方が出迎えてくださり、水分やお菓子、宿泊場所の用意もすべてやってくださっていた。午後の学習会では、10名ほどの利用者の方と一対一で学習を進めた。夜には懇親会があり、光道園のこれまでの歩みや皆さんの熱い思いをお聞きする中で、とても有意義な時間を過ごさせていただいた。

##### (2) 研修2日目

午前中は鯖江事業所、午後は朝日事業所で学習会を行った。何度も来てくださっている方もいらっしゃれば、初めて来てくださる方もいて、私たちも新鮮な学習会となった。また、利用者の方だけでなく、職員の方々も私たちの学習の様子を熱心に見て、具に記録を取り、積極的に学ぼうとする姿があった。

##### (3) 研修3日目

午前中の限られた時間での学習会であったが、限られた情報から教材を選び、それらを通してその方に見える世界を一緒に見ようと試みた。その方がはまる教材もあればそうならない教材もあったが、実物があるからこそ、その方の世界に思いを馳せて次を生み出していくことができた。

帰りには、朝日事業所の職員の方や利用者の方からお見送りをさせていただいた。お見送りでは、利用者の方が感想を言ってくださったり、ハーモニカの演奏をしていただいたり、共に歌を歌ったりした。私は、一緒に学習をさせていただいた方から、その方が点字で打たれたお礼の手紙も頂戴した。

## 4 学んだこと

### ・実践から見えるもの 実践なしでは見えないもの

初めての参加だったため、最初は他の先生方の実践を見させていただいていた。しかし、分からないながらも実際にやってみることで、自分の褒め方の癖や提示する教材の偏りなどに気が付くことが多くあった。また、実践を通して利用者の方とお話させていただく中で、自分の力不足を痛感せざるを得なかった。こうした気づきは、実践なしには見えてこないものであり、実践したからこそ得られた産物だった。

### ・教材と人の関わり合いによって生まれる「次」という瞬間

「楽しかった」「できた」という自らの手で行った実感こそが、学習者主体の「次」を生み出していくことを学んだ。この自覚があることによって、学習者の学びはその人自身の中で意味あるものになっていく。また、それらの実感を生み出すために「教材」と「人」が欠かせないものであることも学んだ。「教材」は学習者が行った「今」の事実を示し、「人」は事実としての教材に言葉や表情で意味づけたり、価値づけたりしていく。こうした営みが学習の中で保障されているからこそ、自分で行ったことが揺るがない事実として学習者に自覚され、次を生み出していくのではないかと感じた。

### ・「実験台」という認識を払拭するためには

これまでは、確かな技術や知識がない私が何かを行うことに対して、自分の中で「実験台にしている」という認識が常にあった。しかし、今回の研修を通して「実験台」という認識を払拭するためには、自分の「本気」と「ずく」が必要であると感じた。自分がずくを出し本気で向き合えば、必ず相手に届く何かがある。そして、その姿で挑む営みは実験台ではなく、人と人の営みである。今回の研修を通して、自分の在り方次第で「実験台」にもなれば、「人と人との営み」にもなることを学んだ。

### ・人はみな「尊厳」を自覚している

当たり前のことであるが、障害はあってもなくても人は人である。たとえ身体が全く動かなくても、心の動きや感情があり、それが尊厳となる。実際に、利用者の方のお話を聞く中で、生きてきた軌跡に触れることが多々あった。どんな話にもストーリーがあり心の動きがあった。そのこと自体が「尊厳」なのだと思った。尊厳は目に見えず、力でどうにでもできてしまう。しかし、その尊厳をどう重んじて関わっていくことができるか、そんなところに「人」が現れてくるのだと利用者の方や職員の方の姿から学ばせていただいた。

### ・私にとっての「学習」とは

「学習」とは何かをできるようにするためだけの営みではない。それ以上に、学習を通して人と人々が心を通わせ、言葉を交わすことこそが大切であることを学んだ。利用者の方とたくさんのやり取りをした。課題ができた瞬間はもちろんのこと、あと一歩の瞬間、難しいながらも試行錯誤している瞬間など、たくさんの瞬間を共に経験した。他者の存在が学習者の行為を肯定し、学習者に自覚されることこそが「学習」だった。

### ・私にとっての「光道園」とは

光道園に着くと、職員の方をはじめ利用者の方が「わあ、先生、遠い中ありがとうね」「早くやりたいね」と、心を全開にして私たちを迎え入れてくださった。そうした関わりの中で、私の心が満たされ、人の温かさが染み込んできた。長いようであつという間の3日間であったが、最後に自然と涙が溢れ出てきたのは、人本来の心に触れ、自分の中で理想とする「人」の像が更新され、人としての深みが増していったからだと感じた。より良く生きようとする人の像を描き、それを肌で感じる場が光道園であることを学んだ。

## 5 最後に

朝日事業所でのお見送りの時には、自然と涙が溢れ出てきた。それは、職員の方や利用者の方のとても温かい心遣いがあったからである。最後に、一緒に学習をした方から点字で打たれたお礼の手紙をいただいたが、それは自分で点字を学び、自分の手で最後まで読みきりたい。

心の底から突き動かされるような貴重な経験をさせていただき、本当にありがとうございました。

東筑摩塩尻教育会長 様

山形村立山形小学校

齊藤 歩(あゆみ)

## 令和7年度 県外視察報告書

視察先所在地 京都府京都市伏見区深草塚本町67

視察先機関名 龍谷大学 深草キャンパス

第3回食育全国大会

○視察テーマ

子どもたちが見て、触れて、心が動くような食育教材や、教科の学習と食育を結びつける方法を学ぶこと

○研修報告

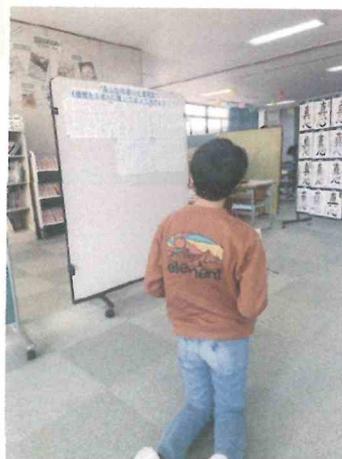
1 子どもの心を動かす食育教材とは 武庫川女子大学教育学部 藤本勇二先生

大学教育学部 藤本勇二先生(ご講演より) 教材は、子どもと先生、そして学習内容をつなぐ大切な道具です。子どもたちが「やってみよう！」と思うきっかけを作り、見て触れることで、「どうしてだろう?」「もっと知りたい!」という問いを引き出すことができると教えていただきました。

【ドキュメンテーションによる学習支援】

幼児教育でいうドキュメンテーションは学習の足跡を記録するものであるのに対し、藤本先生の研究では、小学校では学習前にドキュメンテーションを掲示することで、その後の授業導入がスムーズになったという、実践事例の紹介がされました。

自立した学び手を育てる  
そのために環境で支援する



愛知県東浦町立緒川小学校



この掲示物は、子どもが自分の興味やペースで学ぶことにつながります。子どもたちの「やりたい！」という気持ちに、どこまで寄り添えるかが大切であり、そのためには、質の良いドキュメンテーション(掲示物)が必要だとのお話でした。

大規模センターの食育を進める手段の一つとして、ドキュメンテーションを学校間で回し掲示し、それが掲示された後に、栄養教諭が食育授業を行うという手順も面白いのではないかとのことでした。

## 2 栄養教諭の情熱伝わる掲示からの教材開発

奈良市立大宮小学校 栄養教諭 山中淳代氏  
呉市立荘山田小学校 栄養教諭 山根直美氏  
コメンテーター 兵庫県たつの市立小宅小学校  
校長 清久利和氏

○山中先生の実践では、給食のテーマに沿って、実物の食材を掲示することで子どもの視野を広げているとのことでした。

○山根先生の実践では、広島県の特産「レモン」から小学4年生の社会科の授業と結びつける取り組みを紹介されました。食を通して地域の土地の利や産業も学べる、大変良い教材だと感じました。

○清久先生のお話より、栄養教諭は、①食は楽しい ②食は大切 ③自己管理能力を子どもたちに身につけさせてほしいというお話がありました。また、栄養教諭ひとりで頑張るのではなく、他の先生方からの信頼を得て、周りの人を巻き込みながら食育を広げていってほしいと、力強いエールをいただきました。

### ○視察の感想

視察を終えて、全国の栄養教諭は、誰もが笑顔で、楽しみながら学んでいらっしゃる姿が大変印象的でした。また、どの教材も子どもたちが目で見て触って学べるよう細やかな工夫がされていました。私たちは、ただ知識を得るだけでなく、その知識を活用しより良い食行動ができるような掲示物を考えていきたいと改めて強く感じました。

藤本先生がお話してくださった、ドキュメンテーションは教科の学習と掲示物をつなぐ新しい方法だと感じました。栄養教諭が行う食育授業は、単発で入ることが多いため、ドキュメンテーションを導入することで、授業への流れがよりスムーズになるのではないかと感じました。「質の良いドキュメンテーションが子どものやる気と心を動かす」という言葉を胸に、まずは本校で実践を積み重ね、将来は大規模センターでも実践できるように研鑽したいと思いました。

食に関する分野には、教科の授業以外にも、知ってほしいこと、大切にしてほしいことがたくさんあります。栄養教諭が関わることができる授業時間には限りがあるため、「学びたい！」と思った瞬間に学べる掲示板を十分に活用していきたいと思います。子どもたちが学んだ後に、それが実践につながっているかまでを見つめていけるよう、さらに深く学びたいと思います。

## 令和7年度 県外（県内）視察報告書

視察先所在地 東京都中野区中央1丁目38-1アクロスシティ中野坂上2階  
視察先機関名 翔和学園

○ 視察テーマ

『特別支援の観点における 自己認識と環境調整の在り方』

○ 視察報告

1 自己認識の在り方

(1) 自己認識を図るチェックインについて

①自己認識を図るチェックインとは

チェックインとは、学校に来たら最初に行う心身の健康観察である。

ここでは、体の調子だけでなく心の調子にも着目して自己認識をすることによって、教師がその日にどんなことが起きるのかを予測し、未然に防いだり最小限に抑えたりすることができる。

チェックイン用紙には記述事項が4項目ある。

「今日のお題に関すること」「睡眠に関すること」「調子に関すること」「感情に関すること」

以下で特に自己認識につながる内容を要点的にまとめる。

②「睡眠に関すること」とは

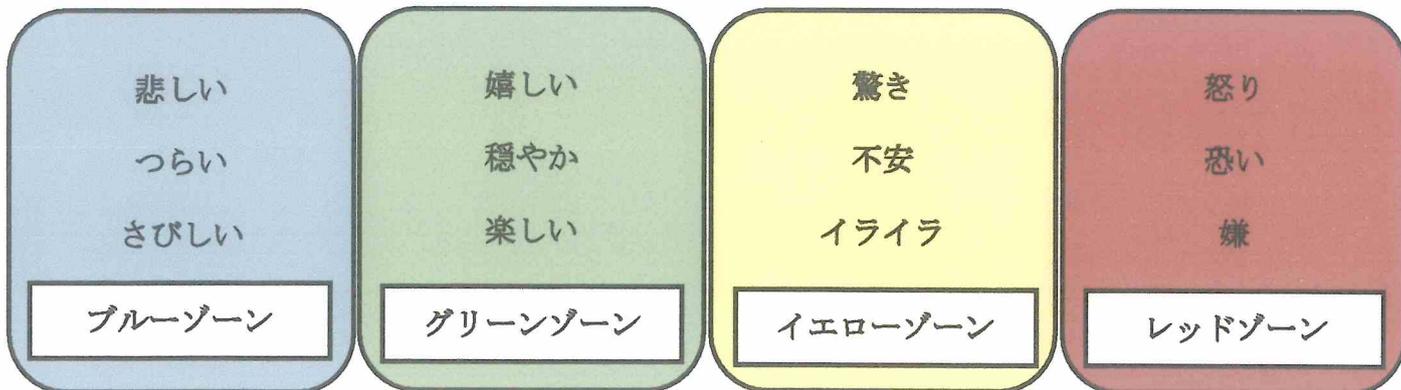
「睡眠に関すること」とは、睡眠時間と目覚めの状態を把握につながるものである。目覚めの状態（すっきり/まあまあすっきり/まあまあだるい/だるい）によって心や体の調子にもつながるので、重要な記述項目であるように感じる。

③「調子に関すること」とは

「調子に関すること」とは、主として体に関する元気さについてである。体の元気さ（とても元気/まあまあ元気/少しだるい/しんどい・つらい）とさらに深ぼった状態の記述（例：眠い/お腹が痛い/咳が出るなど）をしていきながら自己理解・自己認識を図っていく。

④「感情に関すること」とは

「感情に関すること」とは、主として心に関する元気さである。以下の12種の感情の中から今の感情に近いものを選ぶ。さらにその感情になったできごとを思い返すことによって、学校でアセスメントをしたりできる限りの外的要因を避けたりすることができる。



## (2) カームダウントレーニングにおける自己認識

### ①カームダウントレーニングとは

感覚過敏やストレス、自分の感情の制御が効きにくくなり、混乱してしまった際に行う活動である。光や音の刺激が少ない部屋で特定の活動を行いながら気分のリフレッシュや集中力、心の安定を取り戻すために行う。

### ②自己認識との関連性

トレーニングの冒頭で「今の気持ちの状態の把握」を行っていた。「すごく落ち着いている」から「イライラしている・興奮している」までの5段階で自分の心の状態を確認していた。この確認ができる裏には、前述の毎日のチェックインの積み重ねがあるように感じる。日々の心身の状態を理解するために自分と向き合う時間の積み重ねによって、心が乱れてしまった際にも有効であることが分かった。

## 2 環境調整の在り方（学校全体の環境から見えた配慮）

### (1) 照明から見えた配慮

照明はトーンを抑えた暖色系で作られていた。暖色系の照明は温かみがあり、リラックスできる雰囲気がある。また、視覚の感覚過敏のある子たちへの配慮としても低刺激で落ち着くことのできる色合いである。

### (2) 床から見えた配慮

タイルマットや毛足の長い絨毯を使用していた。皮膚感覚に過敏性のある子は床の硬さに、聴覚に過敏性のある子は足音などの環境音などに気になってしまう可能性がある。そのような感覚の過敏さに対応するためにフローリングではなくタイルマットなどの柔らかい素材になっているのではないかと見取った。また、マットなどに座ったり寝転んだりすることで、脳内に「識別系」が働きだす。これは、触れたものの形や硬さ、温度などを認識する力である。もしかしたらこのような科学的根拠からも環境の配慮を行っているのではないかと見取った。

以上のように様々なことに有効な学校全体の環境の配慮をされていた。

## 3 自分の学び

長野県内で何度も講演をお聞きしたことがあったが、講演の内容を実際に現地で目にすることができてすごく貴重だった。特にチェックインについて詳しく説明をしていただいたり、体験させていただいたりすることで分かったこと、気づいたことがあった。

私自身、昨年度に担任しているクラスでSELのチェックインを行っていたことがあった。その際は教室の入り口付近にマグネットで貼っていくシステムだったが、今回の視察を経て紙に書いて残していくことができる良さを実感した。毎日の積み重ねによって天気や行事、その他さまざまな場面での傾向を掴むことができるかもしれない。

また、教室環境の調整についても原級でも工夫できることを学ぶことができたので、教室で生かしていきたい。

以上、11月29日のご報告申し上げます。

視察の機会をくださり、ありがとうございました。

## 令和7年度 県外視察報告書

視察先所在地 静岡県榛原郡吉田町住吉 230  
視察先機関名 静岡県吉田町立吉田中学校

### ○ 視察テーマ

リーディング DX スクールの指定を受け、クラウドを活用した個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実や校務 DX の先進的な取り組みを進めている吉田町の実践を見て学び、日々の授業改善や校務の効率化に活かす。

### ○ 視察報告

#### 1 公開授業の様子

保健体育科 1年生のダンス授業を中心に参観した。

生徒は体育館に入ると整列し、全体であいさつをして授業が始まった。挨拶後は体操を行い、明るい BGM に合わせて補強運動をするなど、スムーズに活動へ移行していた。従来の授業では、前時の学習内容の振り返りや本時の流れの確認を経て授業が始まるイメージがあった。しかし今回の授業では、体操が終わると教師の「いつも通り始めていきます！どうぞ！」の一言のみで、すぐに生徒の主体的な活動が始まった。その指示に迷う生徒はおらず、すぐに教師に動きを見てもらう生徒、端末の参考動画で練習する生徒、友達と互いに動きを確認する生徒など、それぞれが自分のやるべきことを理解し、活動を自律的に進めていた。

30 分の練習とチェックタイムが終わると、タイマーの合図で生徒たちはグループに分かれ、1 vs 1 のダンスバトルを開始した。ここでも教師の直接指示はなく、生徒が流れを把握して動いていた。また、勝敗は教師ではなく生徒が判断しており、「技能をどう見取り、評価するか」という観点で生徒自身が見方・考え方を働かせていた。

10 分間のダンスバトル後は 5 分間の振り返り入力へ移行し、生徒は Google スプレッドシートに話し合いながら振り返りを入力していた。終了後は整列し、教師が端的に本時の良さをまとめた。入力期限も教師が一方的に決めるのではなく、「今日の何時までに締め切りにする？」と生徒に問い、対話の中で設定していた点が印象的であった。端末の持ち帰りが日常化しており、「授業時間が終わったら学びも終わる」という雰囲気ではないことを強く感じた。

ほかの教科でも、学習の進め方は生徒に委ねられ、自ら見通しをもって学習を進めている様子が見られた。吉田中学校では単元導入時に「ラーニングガイド (学びの手引き)」が示され、ルーブリックを確認したうえで学習計画を立てる時間を確保しているとのことであった。

## 2 事後研修会から学んだこと

### (1) 研修主任の先生の話

吉田中学校では、昨年度から「生徒が主体的に学ぶ授業～生徒の資質・能力の向上を目指して～」を研修テーマとして継続している。ICT 活用が進む一方で、

- ・「使っているように見える」だけの活用になっていないか
- ・生徒に委ねた学びを教師が適切に見取れているか

といった課題も挙げられていた。

### (2) 中京大学 泰山 裕先生の講演から

従来の「教師が決めた学び方を先導する授業」も必要であるが、今求められているのは自律的に探究できる子どもの育成である。教師がそばにいても自分で学びを進められるようにすることが重要である。

探究的な学びには、教科の知識や技能に加え、情報を扱う「情報活用能力」が不可欠である。大量の情報を一度に与えて「さあやってみて」と任せても、この力が育っていなければ生徒は学びを進められない。

端末活用が進むと、「学んでいるように見えるが本当に力がついているのか？」という時期が訪れる。これは、教科の学力と主体的な学び方の両方を求めるからこそ起こることである。ICT 活用の有無にかかわらず、まずは学び方の基盤づくりが必要である。学び方が身につくからこそ教科の力も高まっていく。教師に求められるのは、授業のあらゆる場面で探究のサイクル（情報収集→整理・分析→まとめ・表現など）を意識し、生徒と共有することである。どの場面がどの段階なのかを明確にすることで、生徒も自分の学習活動を意識し、探究のサイクルを身につけていく。

## 3 今後に向けて

ICT 端末の活用が進む吉田町を視察して強く感じたのは、目指す姿と育てたい力を明確にすること、生徒に委ねた学びを教師が適切に見取ることの重要性である。

端末活用の事例に目を奪われがちだが、それ以前に、生徒の学習規律が確立し、学習意欲が高いことが大前提である。公開授業以外のクラスは自習であったが、どの学年でも教師不在で自分の課題に集中して取り組んでおり、日常的に「自分で学ぶ力」が育まれていることを感じた。ICT の活用は、生徒の意欲を引き出し、学びを多様かつ深いものにする力を持つことを改めて実感した。

吉田町では小学校3校と中学校が定期的に合同研修を行い、Google チャットで共有を行ったり、指導案を Google ドキュメントで共同編集したりするなど、物理的距離に関係なく小中連携を図っていた。生坂村も小中一貫教育を推進しており、1村1校という点で吉田町と類似している。今回の学びを生坂中の職員に共有するとともに、地理的に離れた生坂小学校とも ICT を活用して連携し、村全体でより高い学びを子どもたちに提供していきたい。